

'*Bengalia circa Calcuttam*' has been affixed to it.

The authors are thankful to Dr. N. C. Mazumdar, Ecologist, Botanical Survey of India, for the latin diagnosis and Director, Botanical Survey of India, for facilities.

* * * *

ビルマ産マメ科植物の1新種 *Dunbaria burmatica* Thoth. et Satyan. を報告した。本種は *Dunbaria circinalis* Baker に似るが、短い腋生の総状花序、直立した小花柄で果時にも彎曲せず、豆果は扁平で6-11種子を入れる点で異なっている。

□Kosuge, T., C.P. Meredith & A. Hollander (ed): **Genetic engineering of plants: An agricultural perspective.** 499 pp. 1983. Plenum Press, New York. ¥26,600. この本は A. Hollander 博士が編集主幹をしている Basic Life Sciences シリーズの第26巻で、1982年8月に米国カリフォルニア大学デービス校で開催された同じ表題のシンポジウムをまとめて出版したものである。植物の遺伝子工学に関してもっとも新しい内容を幅広く扱っており、副題が示すように農業生産への実際的な利用に関した展望的な報告が多い。ほとんどがパイオニア的研究者による報告で、総数25からなり、大きく五つのテーマに分けられる。すなわち、1) 作物改良の概観(報告数1, 以下同じ)、2) 遺伝子(5)、3) ベクター(11)、4) 作物の生産性を品質(4)、5) 作物改良への挑戦(4)、最後に、主として企業人からなる8名の円卓会議の内容が本書をしめくくる。最近の研究の方向を反映して、植物の遺伝子操作に必須であるベクター(遺伝子を運搬・導入するためのDNA)に関する部分(テーマ3)が多く、ほぼ半分の日を割いている。核酸のみを扱っている報告は全体の半分以下で、「染色体の分離と取込み」とか「宿主-寄生者相互作用の進化」とか、一見遺伝子工学とはかけはなれたテーマもあるが、十分に考えぬかれた生理生化学的な視点をもっている。最近、この種の本が多すぎる感がある。しかしこの本は、例えばテーマ3で「花粉培養の利用による遺伝子操作」とか「組織培養中に生じる変異(somaclonal variation)を利用する方法」など、随所に新しい問題提起がなされており、本書をひと味もふた味も違ったものになっている。多くの報告者が「植物の改変に遺伝子操作を用いるにしても、植物科学の基礎分野での大きな発展が必須である」といっているのが印象的である。遺伝子工学の専門家にかざらず、この分野での今後の方向とその発展に関心のある一般の研究者にとっても好個の書であろう。(田仲可昌)